

2013・広大マスタース市民講座報告

「中世ヨーロッパにおける男と女」

山代宏道

東広島市教育委員会主催・広島大学マスタース共催の市民講座「中世ヨーロッパにおける男と女」が7月6日、13日、20日、27日の各土曜日 13:30～15:00、東広島市市民文化センター研修室で開催され、27名の受講申込者でした。

第1回「男と女の理想と現実－中世ヨーロッパの記録から－」（山代宏道）

「女と男が歴史的につくられた」とする立場から、中世ヨーロッパ社会において期待された男女像とその実態を探りました。「男らしさ」と「女らしさ」の議論、中世の結婚観、特に、支配者の妻に期待された社会的役割、ついでアングロ＝ノルマン期のイングランド王と王妃の結婚の実態を明らかにし、さいごに、史料が批判的に語る宮廷での性愛関係を手がかりにして、中世ヨーロッパにおける男と女の理想と現実の一端を明らかにしました。中世ヨーロッパの宮廷文化のひとつは、「恋愛ゲーム」のように決まりごとを楽しむ遊びでした。歴史的に見て、ジェンダーとしての男も女も文化的・宗教的につくられたものであるとすると、中世ヨーロッパの現実社会で期待された男女の役割も、宮廷でみられた愛の諸相も、すべて時代的につくられた文化的所産であったと言えるのかもしれません。



第2回「トリスタンとイゾー—フランス中世文学にみる女と男」（原野 昇）

誤って飲んだ媚薬がもとで、「あなたなくして私なく、私なくしてあなたなし」と愛し合うことになるフランス中世の「トリスタンとイゾー物語」を手がかりに、物語に描かれた男女の愛と、そのような作品が生み出され、鑑賞されたフランス中世社会の理想と現実をみていきました。「トリスタンとイゾー物語」の源泉としてケルトの伝承、駆落ち譚（たとえば「ディアルミッドとグラライネ」）が考えられますが、その素材をフランス12世紀の宮廷・騎士社会に適合させ、新たな作品に作り上げた様子を見ました。それまでに生み出されていた文学作品は聖人伝、武勲詩などが主流であったのに対し、男女の愛を中心テーマとするような物語が生まれた背景には、そのような作品が期待された宮廷社会があります。

第3回「ドイツ中世—叙事詩の中の男と女」（岡崎 忠弘）

今回は、哀れな末路を辿る一人の女に絞ってお話しました。ドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』のヒロインのクリエムヒルトは、苦節26年、フン族のエツツェル王と愛のない再婚までして、謀殺された前夫ジーフリトの無念を晴らしますが、その直後に、王妃としてではなく、鬼女として処断されます。彼女の仇討ちは美談として語られぬどころか、妃は自分の死の仇も討ってもらえず、ジーフリトへのまことも評価されず、哀悼の涙、一粒すら、流してもらえません。なぜか。オンナが自ら剣を手にしてオトコを殺したことが、男性主導の社会の通念から著しく逸脱しており、更に、夫へのまことを貫いて自分の血族を全滅させる新しい女を、底に血族意識が脈々と流れているこの叙事詩の騎士社会は容認できなかったからです。

第4回「最初の男と女——エデンの園の物語」（水田英実）

『創世記』が語る世界創造の伝承によれば、神は「人がひとりであるのはよくない。彼にふさわしい助け手を造ろう」と言って最初の女を創造します。人は「これこそわたしの骨からの骨、肉からの肉」と言って女を妻に迎えます。よく知られたエデンの園の物語です。中世キリスト教神学者トマス・アクィナスは『神学大全』の中で、エデンの園の存在を否定する合理的根拠はないと論じ、東方の地にあるとする説を支持しています。『創世記』が最初の男とともに「助け手」として最初の女が造られたことを明記しているのは、生殖のために必要だからであるとしても、生殖がその生命活動のすべてであるような植物と違って、生殖以外の活動を行う動物に、性を異にする個体の別がある以上に、人間に男女の別があるのは、生殖も含めてすべての活動を、理性と意志を備えた一箇の独立した主体的存在として行うものであることによると洞察しています。ここに男尊女卑の思想はありません。